

第7章 震災を語り継ぐ

震災の教訓を風化させないため、次世代に語り継いでいくにはどうしたらいいでしょうか。さまざまな方法で震災を伝え、「語り部」となっている高校生の活動から考えていきましょう。



語り部グループ「まずもって」



(写真提供: キベジュンイチロウ / 東北復興新聞)

語り部の活動をする志津川高校の佐藤美南さん

「どのルートを通って逃げたか全然覚えてなくて、今でも思い出せません。涙が出てきて、友達や先生の声も聞こえなくてパニックで、しゃがみこんでいました。少し落ち着いてから、余震が続いていたんですが体育館に戻りました。30分くらいたつと町の人々が避難してきて、これから『なじよすっぺかな』(どうしようかな)って話しているのが聞こえました。」

2013(平成25)年9月、志津川高校1年の佐藤美南さんは県外から来た約50人を前に、被災体験を語り始めました。

「家族の安否がわからず、覚えている

のは、星がすごくきれいで、オリオン座がすごくはっきり見えていたこと。そして、その星を、幼いころに母と一緒に見たことを思い出していた。」ということでした。

佐藤さん一家は津波で自宅を失ったため、岩手県一関市へ一時避難しました。新しい学校で友達もできましたが、一方で、毎日を楽しみと思えない自分がいました。震災前は、「田舎から早く出たいわ。」と口にすることもありましたが、離れてみると生まれ育った志津川をすごく好きな自分に気が付きました。親に何度も「帰りたい。」と伝え、志津川に戻ってきました。

しかし、いざ戻ってみると「それだけでいいの? 志津川のために自分にできることはない?」と思い始めました。

2013(平成25)年3月11日、先輩たちが震災を伝える学生団体「まずもって」を結成しました。正式名称は「まずもって、かだっからきいてけさいん」。これは、「とりあえず語るから聞いてください。」を意味する南三陸の方言だそうです。佐藤さんも、参加することに決めました。

実際に「語り部デビュー」をしたのは4月末。相手は京都から来た中学生のグループでした。「自分でいいのか。」と直前まで悩みましたが、「涙を流しながら聴いてくれました。自分の思いが伝わったと実感できた。」と言います。夏休みには、1人で13回ほど語り、7月には外国人に向けて英語のスピーチにも初挑戦しました。「1回ごとに新しいつながりができ、今は語り部の活動が楽しい。」と目を輝かせています。

「南三陸町がすてきな町になるように、私たちもがんばっていきたい。また遊びに来てください。」

佐藤さんはこう力強く呼びかけています。

(出典: 東北復興新聞 2013年9月1日付記事より抜粋)



他県の高中生との交流による震災の語り継ぎ

石巻西高校では、2015(平成27)年3月、32名の石巻西高生と2名のOGが、東京都より招待を受け、全体で180校以上もの都立高校が参加する「東京 生徒による防災サミット」に参加してきました。

このサミットは、首都直下型地震の発生が危惧されている中、災害時には大きな力となりうる高校生が、防災活動の取り組みを共有し、災害時の対応や備えを話し合うもので、平成25年度から行っています。

東日本大震災では、石巻西高校の周辺が津波の被害を受け、学校がある東松島市でも多くの地域の方々が尊い命を落としました。さらに当時の在校生の中にも津波により亡くなった生徒がいました。この震災で、命の重み、避難所生活で日常生活が一変したことなど、この震災の厳しい教訓を後世に、そして、多くの人たちに伝えていくことが大切であるということから、東日本大震災にしっかりと向き合おうとしています。

石巻西高校は、これまでもたくさんの学校との交流を重ねてきました。

世界や日本各地で災害が起きており、今後もさまざまな災害が予想されていることから、東日本大震災を経験した宮城の高校生と今後の防災について語り合い、自分たちにできること、自分たちができることを模索しています。

このサミットでは、東京都の高校生と一緒にワークショップを行いました。そのなかで、石巻西高生は「命と向き合う防災教育」を伝えました。そして、「一人の力は微力でも決して無力ではない」ことを証明してくれました。

東京都指導主事の先生が次のような内容のメールを送ってくれました。

「石巻西高のみなさん本当にありがとうございました。参加した教師にも生徒にも確かな種が芽生えたと思います。今日の出会いが、都立高校を変えると確信しています。本当にありがとうございました。」と。

これからも、震災のことを伝え、これからの未来のことを語り合っていきます。

みんなが災害で二度と悲しい思いをしないために。

(出典: 石巻西高実況中継～学校の情報や生徒の様子をリアルタイムで家庭に届けます～平成27年3月30日第60号より抜粋)



生徒による防災サミット



ワークショップ



東日本大震災から数年経過した現在、震災の教訓を風化させないため、私たちは何をどのように語り継いでいったらよいか話し合ってみましょう。